

「この作家の作品を読んでいると、「美味しそうな料理が出てくるなあ。食べたいなあ」といつもに考えてしまいます。物語も面白くどんだん話の中に引き込まれるのですが、そこに料理の描写が入るともう物語はそっこのけで料理の想像をしてしまいます。この本は7つの短編が収録されていて、メインとなる人物は秋山小兵衛という剣の道の達人。前作を読んでいるのでどういう経歴の人物かは分かりませんが、とにかくとても強く人情あふれる人のようです。彼の身近な人物が事件に巻き込まれ小兵衛が助けにはいる。またある時は彼の息子・秋山大治郎が中心になって解決するというストーリーが展開されます。その中で物語としてはとても切ない話ですが先述したように料理の描写に引き寄せられた物が「金貸し幸右衛門」と言う話です。金貸しを生業としている浅野幸右衛門が何者かに襲われるところを小兵衛が助け、幸右衛門は早くに妻を亡くした後大事に育ててきた一人娘を何者かに拐かされたのです。その娘の消息を見つけるまで死ぬに死ねないといった事情を抱えていました。それを聞いた小兵衛は助太刀をする事になり暗殺者の手から幸右衛門を救い事件を解決します。ハッピーエンドで終わらないこの話の途中に出てきた、牡蠣の酢振すぶりへ生海苔と微塵生姜みじんを添えた物」これはきつと素敵な味なんだろうとまだ食べたことのない料理に思いを馳せたのでした。

F N .

^新潮文庫^

掲載の記事 写真 イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

株(ファッションビジネス御堂筋新聞